様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 ２４ 年 ６ 月 ５ 日現在

機関番号：３４１０４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009 ～ 2011
課題番号： ２１５２０５５３
研究課題名（和文）ライフヒストリー的アプローチを活かした総合的な日本語教師の力量研究

研究課題名（英文）
A synthetic research on the formation of competence of Japanese language teacher using the life history approach

研究代表者
康 鳳麗（Kang Feng Li）
鈴鹿医療科学大学・鍼灸学部・准教授
研究者番号：３０３９９０３４

研究成果の概要（和文）：

三年間に渡る事例研究は下記のように二つに大別できる。

１．個別的事例研究　　２．比較対照的事例研究

個別的事例研究としては、個性的な授業スタイルをつくりあげてきているW氏とK氏をとりあげ、その来歴を明らかにした（業績②、⑥）。その結果、両氏とも観の変革と授業スタイルの形成が同時に行われていることが明らかになった。実際の教師の成長の個性的な様態は、技術主義的な理解（技術の習得と応用）では限界があり、観の変革と授業スタイルの形成の力動的な関係の中で理解されるべきだ考えるに至った（業績⑤、⑦）。

比較対照的事例研究としては、教育条件や環境の差異を最大にするサンプリングを行った。国内においては熟練日本語教師二人の比較対照研究を行い（業績③）、中国における中国人日本語教師との比較対照研究を行った（業績①、⑨）。その結果、熟練教師には、条件や環境を超えてある種の共通性を見出すことができた。それは「二重の応答性」と呼べるものである。

授業の本質がコミュニケーションにある以上、「二重の応答性」の析出は予想されたことであったが、熟練教師は一対多の授業の形式にあっても、五感を使いアンテナをはって、学習者の反応をとらえながら、瞬時瞬時に授業の展開、働きかけを行っており、きわめて高度に「二重の応答性」を発揮していることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The case study over three years can be divided roughly into two as follows.
1. Individual Case Study　2. Comparative Case Study
We picked up Mrs. W and Mrs. K who are completing an individual teaching style as an individual case study and clarified the career and life history.
As a result, in both, it became clear that change of a view and formation of a teaching style are performed simultaneously. There are a limit in technocracy understanding (technical acquisition and application) the individual aspect of an actual teacher's growth, so we should be understood in the dynamic relation of formation between the change of a view, and a teaching style in them.

We performed the sampling which makes the difference between educational conditions or environment the maximum as a comparative case study. In domestic , two skillful Japanese teachers' comparative research was done , and comparative research with the Chinese Japanese language teachers in China was done. As a result, the similarity of the kind which has exceeded conditions and environment to the skillful teacher was able to be found out. It can be called "a double response."

If the essence of a lesson was on communication at all, the deposit of "the double response" was expected. Having crawled on the antenna using the senses and catching a student's reaction, even if the skillful teacher was in the form of a one to many lesson, deployment of a lesson and influence are performed in an instant , and it became clear to demonstrate "the double response" very highly.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1800000	540000	2340000
2010 年度	800000	240000	1040000
2011 年度	700000	210000	910000
年度			
年度			
総　計	3300000	990000	4290000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：ライフヒストリー的アプローチ、力量形成、授業スタイル、「観」の変革、熟練教師の熟練性、二重の応答性

１．研究開始当初の背景

筆者らはこれまで、日本語教師の授業スタイルの固有性や歴史性を踏まえたライフヒストリー的アプローチによる日本語教師の力量形成研究を展開してきた（科研費 H18-19 年度　基盤研究（C）（１）「日本語教師の力量形成へのライフヒストリー的アプローチ」研究代表者：康鳳麗）。

前研究を通して明らかになったこととして、大きく次の２点が指摘できる。１点目は、教える条件や環境とは関係なくどの日本語教師においてもそれぞれ独自な「授業スタイル」が存在することである。２点目は、個々の教師の授業スタイルは、各人の実践的経験やそのリフレクションに大きな影響を受けていることである。

本研究は、これまでの研究の延長線にあり、ライフヒストリー的アプローチという研究手法を用いて、日本語教師一人ひとりの授業スタイルの固有性や歴史性を踏まえた力量形成の過程に焦点化して、研究を深化させることを企図したものである。

日本語教師の力量形成については、1980 年代までは「教師トレーニング」、すなわち「教師として備えるべきだと考えられている諸技術を指導者が訓練によって教えこみ

マスターさせることで、教師の養成、つまり教授能力の養成を図ろうとするものである」(岡崎 1997)と考えられてきた。その前提として岡崎は「①教授能力は細かく定式化された技術、例えば指名の仕方、誤りの訂正の仕方、によって構成されるという教授能力についての見方、②そうした教授能力は実習生（現職）の個人差を考慮に入れなくても一律に教え込むことが可能だという教師教育についての見方、③教える対象である学習者の個人差を考慮しなくても同一の教え方で教えられるという言語教育についての見方」があると指摘している。

この考え方は、学習者の多様化、それに伴う日本語教育の条件、状況の変化によって変革を余議なくされるが、変革の理論的なバックボーンになったのがドナルド・ショーン（Donald A.SchÖn）の専門家像、「反省的実践家」の提起であった(Donald A.SchÖn 著、佐藤・秋田訳 2001)。ショーンは「専門家の実践を、より複雑で複合的な問題に対して、絶えず変化する状況との対話、自分との対話、行為へのふり返りを通して、複雑な実践に立ち向かっている」と述べる。そのなかで、所与の科学的知識を適用することを越えた「行為の中の知」「行為の中の省察」「状況との対話」と捉え、実践の場面で、専門家の技術的「知識」の有無からだけではなく、何を見、考え、判断し、行動しているか、という視点から「専門家」とその「知」を捉えなおした。

こうした専門家像のとらえなおし（「技術的熟達者」⇒「反省的実践家」）は「教師トレーニング」そのものが専門家養成教育として成立するのか根本的な再検討を迫っているといえよう。つまり、専門家像のとらえなおし、は専門家として必要な力量のとらえなおし、また養成教育の捉え直しへと必然的に連動していく。

反省的実践家像を新たな専門家像として措定した場合、どのような力量が必要なのか、またそれをどのような経験の再構成（カリキュラム）によって身につけていくことができるか、大きな課題である。しかしながら、教師が熟達化する過程、つまり観と知識的なスキルとの関係は十分に明らかにされているとは言えない。

２．研究の目的

本研究「ライフヒストリー的アプローチを活かした総合的な日本語教師の力量研究」は、日本語教師の力量がいかに形成されているかを明らかにし、日本語教師養成プログラム開発のための資料を提供することを目的とする。具体的には、第一に日本語教師の力量形成のコアとなる授業スタイル構築のプロセスをライフヒストリー的アプローチにより事例研究として積み上げをはかること、第二に日本語教師としての力量形成に必要不可欠な実践経験内容を明らかにすること、第三にその知見をもとに日本語教師養成プログラム開発への基盤的な資料を提供することである。

３．研究の方法

上記の観点から、本研究では三年間のスパンの中で、研究協力者の日本語教師を対象に授業見学・ライフヒストリーインタビューを実施して、授業スタイルの抽出・分析を課題とした。

教師の「授業スタイル」の理解のため、ライフヒストリー的アプローチを用いた。まずこの方法論で用いる参加観察やインタビュー研究等の質的研究の意義を、社会学、人類学、民族学等の幅広い先行研究のオーバービューの上に再確認すると同時に、その問題点の解明・克服について考究を重ね、標準化を図った。

具体的事例研究は、基本的には教師に対す

るインタビュー、学習者のノートや感想等のドキュメント、そして参加観察記録のトライアンギュレーションによって行われた。研究期間中フィールドとして日本国内においては四日市日本語学校、秋田市国際教養大学、リバティインターナショナルスクール、東別院日本語教室、春日井ふれあい教室、海外においては（中国）天津外国語学院、天津師範大学、西安外国語大学、陝西師範大学、長安大学、（タイ）ラジャバット大学に出かけた。そこで様々な目的を持つ学習者（例えば、留学生、留学生、地域で暮らす日本語支援を必要とする生活者、海外の大学日本語専攻学生等）を対象に教える 20～50 代の、経歴の異なる日本語教師の授業を見学し、ライフヒストリーインタビューを実施した。教師たち自らの授業実践経験が自分の授業スタイル形成にどのような影響を与えたか、インタビュー、授業参観、残されている授業記録等を用いて明らかにした。

４．研究成果

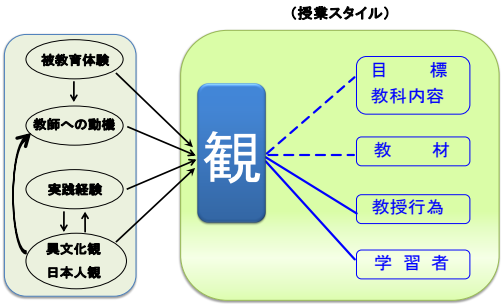
三年間に渡って行なってきた事例研究の中でいくつかの対話的な仮説が明らかにされてきた。下記のように三つに大別できる。

（１）個別的事例研究

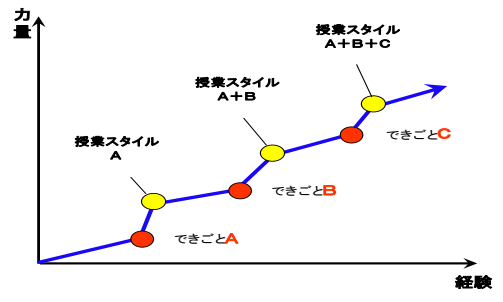
個別的事例研究としては、個性的な授業スタイルをつくりあげてきているＷ氏とＫ氏をとりあげ、その来歴を明らかにした(業績②、⑥)。その結果、両氏とも観の変革と授業スタイルの形成が同時に行われていることが明らかになった。実際の教師の成長の個性的な様態は、技術主義的な理解（技術の習得と応用）では限界があり、観の変革と授業スタイルの形成の力動的な関係の中で理解されるべきだと考える(業績⑤、⑦)。

仮説１は観と授業技術との関係仮説である。授業スタイルの形成は、単に技術の習得や知識の活用だけではなく、経験、振り返りによって得られる暗黙知的な実践的知識をも含みこみ、ある観のもとに統一されていく過程だと考えることができる。観の形成ができごととの出会いと関係している（仮説２）。

仮説１　観と授業スタイル



仮説２　授業スタイル形成と「できごと」

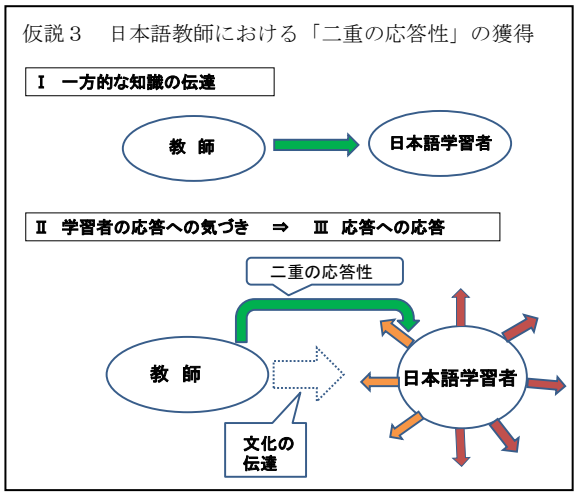


（２）比較対照的事例研究

比較対照的事例研究としては、教育条件や環境の差異を最大にするサンプリングを行った。国内においては熟練日本語教師二人の比較対照研究を行い（業績③）、中国における中国人日本語教師との比較対照研究を行った（業績①、⑨）。その結果、熟練教師には、条件や環境を超えてある種の共通性を見出すことができた。それを私たちは「二重の応答性」（仮説３）と同定し、熟練教師の学習者との対話力に関するものである。つまり、どのような授業スタイルであれ、この「二重の応答性」が実践においてより高度に発揮されるのが熟練教師の熟練たる所以ではないかと考えるに至っている。

授業の本質がコミュニケーションにある

以上、「二重の応答性」の析出は予想されたことであったが、熟練教師は一対多の授業の形式にあっても、五感を使いアンテナをはって、学習者の反応をとらえながら、瞬時瞬時に授業の展開、働きかけを行っており、きわめて高度に「二重の応答性」を発揮していることが明らかになった。



（３）事例研究の説得力とモデル性（参照例）

事例研究は、アンケート等の量的な研究とは異なり、事例は一般性や典型性が担保されているわけではないため、長らく「信頼性」と「妥当性」の問題としてこの問題は議論されてきた。質的研究における「信頼性」「妥当性」は、研究の手続きとして研究の方法を公開すること（研究方法の透明性）、研究経緯から結果への過程の共有化（対話性の確保）によって間主観性が高められる。私たちは、上記の研究手続き以外にも、「信頼性」「妥当性」を高めるために、①理論的なサンプリング、②データのトライアンギュレーション、③対話性の確保（とくに事例対象者との対話）を大切にしてきた。こうした事例研究は、そのリアリティゆえに、読者である「これから日本語教師になろうとする」者に、自らのモデル（参照例）を与えるであろう。またそのライフヒストリーにより、事例でとりあげられた教師の「あこがれ」や「こだわり」を知ることができる。それは、ある意味では日本語教員養成のカリキュラムとして機能することになる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　９　件）

① 森脇健夫，康鳳麗，坂本勝信，熟練日本語教師の力量内容とその形成—ライフヒストリー的アプローチによる日中の日本語教師の授業スタイルの形成研究—，三重大学教育学部研究紀要，査読無，第 63 巻 2012，267-273
② 森脇健夫、康鳳麗、坂本勝信、和田明子，日本語教師の力量形成研究——線画の発達と「観」の形成——，三重大学国際交流センター紀要，査読有，第6号，2011，53-63
③ 康鳳麗，森脇健夫，坂本勝信，日本語教師の授業スタイル形成としての力量形成研究—ライフヒストリー的アプローチを用いて—，鈴鹿医療科学大学紀要，査読有，No17，2010，39-48
④ 森脇健夫，学びの共同体とは？，授業づくりネットワーク，査読無，No.305，2010，10-12
⑤ 森脇健夫，教師文化と「観」の変容，授業づくりネットワーク，査読無，No.303，2010，4-7
⑥ 森脇健夫，康鳳麗，坂本勝信，小西知代，日本語教師の専門性とその形成—個別事例（小西知代氏）の実践分析及びライフヒストリー研究から—，三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，査読無，No.29，2009，11-16
⑦ 森脇健夫，図解！ライフヒストリーアプローチとは何か？，授業づくりネットワーク，No.296，2009，4-7
⑧ 坂本勝信，康鳳麗，森脇健夫，中学年の日本人児童の物語描写における「視座」の実態について－日本人大学生との比較を通して－，常葉学園大学研究紀要，査読無，No.25，2009，205-213
⑨ 康鳳麗，森脇健夫，坂本勝信，中国人日本語教師の授業スタイル形成としての力量形成—ライフヒストリー的アプローチを用いた事例研究を通して—，鈴鹿医療科学大学研究紀要，査読有，No.15，2008，19-28

〔学会発表〕（計　５　件）

① 康鳳麗，森脇健夫，坂本勝信，熟練日本

語教師の力量内容とその形成－ライフヒストリー的アプローチによる日中の日本語教師の授業スタイルの形成研究－，2011世界日本語教育研究大会，2011年8月，中国天津市

② 康鳳麗，森脇健夫，坂本勝信，熟練日本語教師の力量形成と〔二重の応答性〕に関する研究，中部教育学会第60回大会，2011年6月25日，静岡大学

③ 康鳳麗，森脇健夫，坂本勝信，日本語教師の授業スタイル形成としての力量形成 ―ライフヒストリー的アプローチを用いて―，日本語教育学会，2010年10月，神戸大学

④ 森脇健夫、根津知佳子，教育実践の質的研究の射程とアプローチ記述データによる観の照射可能性を求めて，日本質的心理学会，２００９年９月１３日，札幌市

⑤ 康鳳麗，森脇健夫，坂本勝信，質的研究としてのライフヒストリー的アプローチによる日本語教師の力量研究の意義と課題，中部教育学会，2009 年 6 月 29 日，名古屋市

〔図書〕（計　7　件）

① 森脇健夫（共著），授業研究方法論の系譜と今後の展望，授業づくりと学びの構造，学分社，査読無，37-87，　2011

② 田中耕治、森脇健夫、徳岡慶一，学文社，授業づくりと学びの創造，2011，51（165）

③ 西隈俊哉、相場康子、坂本勝信、伊東克洋、鈴木加珠子、仲渡恵理子，アルク，パターン別徹底ドリル日本語能力試験Ｎ１，2010，46（211）

④ 西隈俊哉、相場康子、坂本勝信、伊東克洋、鈴木加珠子、仲渡恵理子，アルク，パターン別徹底ドリル日本語能力試験Ｎ２，2010，46（211）

⑤ 西隈俊哉、相場康子、坂本勝信、伊東克洋、鈴木加珠子、仲渡恵理子，アルク，パターン別徹底ドリル日本語能力試験Ｎ３，2010，46（198）

⑥ 坂本勝信・猪塚恵美子・遠藤藍子、他，アルク，2007～2009 年度日本語教育能力検定試験　合格するための問題集，2009，330

⑦ 相場康子・近藤佳子・坂本勝信・西隈俊哉，鴻儒堂出版社，日本語能力試験３級合格への道 2009，142

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
康　鳳麗（kang　fengli　　）
鈴鹿医療科学大学・鍼灸学部・准教授
研究者番号：３０３９９０３４

(2)研究分担者
森脇　健夫（moriwaki　takeo　　）
三重大学・教育学部・教授
研究者番号：２０１７４４６９

(3)研究分担者
坂本　勝信（sakamoto　masanobu　　）
浜松大学・ビジネスデザイン学部・准教授
研究者番号：４０３８７５０１